蒼炎と白雷

芽良天清

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼炎と白雷

【Ｎコード】
Ｎ４４７２Ｉ

【作者名】
芽良天清

【あらすじ】
西暦２０５０年、世界は激変した。世界大災厄と呼ばれる、超地殻変動が発生し、大陸は割れ、次々に海へと姿を消した。
しかし、何故か、島国『日本』は地球上にその姿を残している。
そして、その日本で、人間の存亡を賭けた、《願い》と《願い》の戦いが始まろうとしている。

鬼に金棒

核問題、世界大恐慌、戦争・・・そんな事があった時代からそう遠くない未来。

世界は・・・地球は豹変した。

世界大災厄

誰もが予想だにしなかった超地殻変動。星の怒りとも思える轟音を響かせ、大陸は割れ、沈み、世界は未曾有の大混乱となった。

政治家・富裕層の者達は我先にと、沈み行く自国を捨て、安全な国へと避難した。だが人間のエゴは止まらない。大量の人間が他の国に全て入れる訳も無く、政治家・富裕層も選別をされ始めた。・・・・しかしそれも意味を持たなかった。なぜなら、逃げた国々も地殻変動で沈んでいったのだ。

一人の政治家は見た。『ここは安全なハズだろう?』。そんな言葉が脳裏をかすめ、大陸の豊かな自然が、広大な深緑が、大地へと壮大な音を発てて消えていくのを。そして自身の生命が大地の底に消えていくのを・・

最初の地殻変動が起こり、大陸が海に沈んでから、わずか3ヶ月の間に全ての大陸が沈んだ。そして、大陸が沈んだ影響で海面が異常上昇し、島国も続いて沈んでいった・・

地球は、その姿を青く変えた。いや、『戻った』と言った方が適当だろうか。

騒々しいバイクのエンジン音が響く。意味もなく、ただ噴かしているだけ。しかしその騒音は、付近の人間にとって、『恐怖』を告げるモノ以外にない。

建物はひび割れ、荒み、ほとんどの建造物が植物に飲み込まれかけている。道路は各所で隆起、沈没し、地割れも発生しており、車は全く通らず、人も建物に隠れていてほとんどいない。

「ハハハハハ！」

ガラの悪い青年達が四人、道路の中央でバイクを止めて、喋っている。通常よりもかなり声量は大きく、もはや『喋る』の域ではないが。

周りの人間は迷惑と言うよりも恐怖の色しか顔に出ていない。確かにガラは悪いが、青年四人になぜそこまで恐怖するのだろうか。

「・・・あぁ！？何見てんだ、てめぇ！！」

少し経って、近くのビルの影から様子を見ていた少年に一人の青年が目を付け、怒鳴りながらゆっくりと近付いて行く。他の青年達も少年を囲うよう、逃げられないように包囲して近づいていく。少年はこれから自身に起こるであろう、『不幸』を予感してか、ガクガクと震えている。歯を食いしばり、目は見開いている。少年の頭の中に自身の心臓の鼓動が、早く、大きく響く。

「どうしたのかな～？携帯のバイブみたいに震えちゃって～？面白くないよ～？」

青年の一人が少年の様子を見て、ケラケラと笑いながら他の青年達を煽る。すると他の青年達もつられて笑い出していく。中にはわざとらしく腹を押さえて大笑いする者もいる。

「っ！！」

と、その一瞬の隙を突いて、少年は勇気を振り絞り、青年達の横を走り抜けようとする・・・が。

「おっと！どこ行くんだぁ！？坊主！」

青年の一人が、少年の背中の服を強引に掴み、少年は勢い余って転倒しそうになる。すると青年が少年を勢いよく引き寄せ、首に腕をまわす。抱き起こす、というよりは締め上げる状態で少年を拘束する。少年の首に完全な状態で青年の腕が回り、一気に締め上げる。

「っごふ！」

少年は急激に首を圧迫され、見る見る内に顔色が変色していく。掴んでいる青年の腕から解放されようと、必至に腕に指をかけて引き剥がそうとするが、全く動かない。それどころか、少年を更に締め上げ、遂には少年の足は完全に地面から離れてしまった。見た感じ、１２歳位の少年の体重で、しかも苦し紛れに足を振り暴れている少年を、一般から見ても普通の肉付きの青年が、何故あんなにも軽々と締め上げることが可能なのだろうか。

「おいおい、タク君。いくらゲイだからって男の子抱きしめすぎだよ～、ヘンタ～イ！」
「バッカ！！ふざけたこと言ってんじゃねぇよ！誰がゲイだっつーの！」

苦しみ藻掻く少年をまるで遊び道具のように扱う青年達。『罪悪感』はとうに無くなっているようだ。同じ人間をまるで虫けらのように扱う、その姿は確かに恐怖を感じる。ここに居る人間達が怯えていたのはこれだったのだ。

「しっかし、マジで死んじまうんじゃね？顔色とかチョーうける感じになってきたし。」

青年の言うとおり、少年の顔色は窒息状態により、赤が更に赤を帯びたような顔色に変色していた。しかし、端から見れば決して『うける』ような状態ではない。青年達の少年に対する感覚は間違いなく『異常』だ。

そして遂に少年最後の抵抗である足の振りも止まってしまう。それに青年達は気付いてもいないようだ。少年の命がこんなにも無惨に消えていってしまう。罪もなく、平凡な少年が何故このような目に遭わなければいけないのか。

周囲の人間からは、『同情』とも取れる、しかし自分達には何も出来ない、と言った感情が顔から見て取れる。次に少年のようにされてしまうのは自分かもしれない、といった恐怖もあるのだろう。隙を見て付近から遠離ろうとする人間もいる。

と、その時、付近の人間とは全く違う動きをする影があった。その影は、少年がいた建物の影をゆっくりと、青年達に気付かれないよ

うに進んでいった。その手には使い古された金属バットが握られている。

「・・・うおりゃぁぁぁぁぁっ！！！」

そして青年達の真後ろから勢いよく、金属バットを振り上げて姿を現す。顔は野球帽を深くかぶっていて分からない。走り込んで来たスピードと振り上げたバットが驚異的な打撃力を生む。少年に気を取られていたせいもあり、反応が遅れた青年の頭をバットが直撃する。

ガンッ！！！

「ごっ・・あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

直撃を受けた青年は後頭部から血を流し、頭を抑えて地面を転げ回る。あまりの痛みに低い唸り声のようなものを出し、少し経ち、失神したのか動かなくなった。

更にバットは次の標的を狙う。倒れた青年に目を向け、狼狽えた青年、その視線が再び前を向いた瞬間、目の前に金属バットが迫っていた。最初の打撃から勢いを殺さず、体を捻り回転をかけ、二人目の顔面に正確に振り抜かれる。

ヒュッ　ゴンッ！！

「んぁ！！！」

二人目はちょうど鼻に当たったようだ。一人目ほど効いてはいないようだが、鼻血が勢いよく流れ、その血の多さに膝を折り、面食ら

っていて動けない。

この数秒の間に二人もやられた事に、残りの二人は一抹の恐怖を感じ警戒を強める。青年は捕まえていた少年を横に放り投げ、体勢を整える。少年はゴロゴロと道を転がり、ゴホゴホと咳き込み始まった。窒息状態から解放され、だんだんと意識も戻って来る。

「お前っ！」

「！？・・・・・っ！」

バットの人間が少年に呼びかける。それに朦朧としていた少年の意識が、はっきりとしたものへと戻る。状況を察知し、若干フラフラしながら他の建物の影へと少年は逃げていく。それを見ていた近くの住民が少年を手招きして呼び寄せる。近くまで来た少年に肩を貸し、建物の中へと連れて行った。

「・・・、もう大丈夫だな」

バットの人間は少年を見届けそう言うと、かぶっていた野球帽を高らかに放り投げ、青年達にバットを向ける。その姿は・・・

「「・・・・・え、女？」」

青年達から呆気に取られた声が出る。野球帽が取れて見えたその顔は確かに『女』。しかし、服装は何ともラフな格好で、パッと見ても女性には見えない。しかも先ほどの打撃の強さから言っても、明らかに常人離れしている。青年達は現状を理解しようと頭を回転させる。そして一つの結論に到達する。

「お前、そんなベビーフェイス（？）な顔して出てくるんじゃねぇよ！！女だと思ったじゃねぇか！！！」
「そうだそうだ！俺達の頭の中の『女』が崩壊する所だったじゃねぇか！！」

すぐに『あんな剛腕が女のハズがない』との結論に至り、強襲されてちょっと驚いちゃった、いきなり悪者でシリアスみたいにしてたのにぶち壊しじゃん！、みたいな雰囲気を払拭しようとする。

「・・・・・女だと、・・・・思った？」

青年達の糾弾の後、女？が豹変する。なんだろうか、あの後ろから立ち上るドス黒い気配は。執念？憎悪？それとも・・・・

「『女』で正解だ、馬鹿野郎共ぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」

純粋な『怒り』だった。

再び金属バットを振り上げ、まるで鬼が宿ったかのように、圧倒的な威圧感を携えて、青年達に突進していく。

青年達は感じた。久方ぶり自分達に降りかかる恐怖を。

青年達は思った。え？マジで女だったの？マジで？

青年達は叫んだ。

「「いやいやいや！！！嫌ぁぁぁぁぁ！！！」」

いやいやいや、それお前、嘘だろ。

前半はそんな事を言いたかったのだろう。どう考えてもそう思うだろう、と。

ちょ、待って！そんな鬼に金棒（金属バット）みたいな状態で向かって来ないで！！

後半はそんな風に思ったのだろう。自分でちょっと『上手いこと言った』と思いながら。

女性は青年達の前で再び跳躍し、上段の構えで上から金棒を振り下ろしてくる。青年達は色々考えていたせいもあり、反応が大幅に遅れてしまう。アホだ。

直撃を確信し、女性の口が吊り上がる。その姿はまさに鬼。

ゴンッ！！！

「おぶっ！！！」

頭部に直撃を受け、そのままの勢いで青年はアスファルトに叩き付けられる。顔面もアスファルトに強打し、若干、手足がピクピクと痙攣を起こしている。彼はしばらく起き上がれないだろう。それほどのダメージを喰らった気がする。

「ひっいいいいいいいいい！！！！」

遂に一人となってしまい、その恐怖から最後の青年は女性に背を向け、逃げ去ろうとする。自分が乗ってきたバイクにさえ辿り着けれ

ば、そう最後の希望を込め、自分の足に残りの力を全てかける。

青年はふと思った。自分はこんなにも速く走れるではないか。まじめに陸上とかやってたら、部のエースになって、チヤホヤされて、可愛いマネージャーと付き合って・・・

「おべ！！」

後方から聞き慣れない言葉が聞こえた。あれは確か、今し方、鬼に金棒で殴られ、ピクピクしてた友人の声だ。

その時、青年の周りがスローになる。正確には青年の感じ方がスローになったのだが。

自身の足の速さと、過去への執着で、空想へと引き込まれていた頭が現実に引き戻される。青年は後方を振り返る。

鬼は居ない。居るのはさらに手足をピクピクさせている友人。

ふと、黒い影がフッと青年の姿を包む。青年はそれに気付き、視線を上に上げる。

・・・鬼が降ってきた。

（ああ、そうか。今の奇声は倒れている友人が更に踏まれた時の声だったんだな。ピクピクしてるのに酷い事するなぁ。上から降ってきたって事は、彼への踏み付けは跳躍する為の力がかかっていて・・・）

青年の顔に、先ほどの影よりも更に濃い影が映る。それは細い棒状の影で・・・

ガンッ!!ゴロゴロゴロッ!!!

青年の頭に金棒が直撃し、走っていた勢いでゴロゴロとアスファルトを前転で転がっていく。途中、隆起しているアスファルトに当たり、ようやく止まった。

遂にたった一人で、４人の青年を倒してしまった。

女性は金属バットを自分の肩に当て、トントン、と『一仕事終わった』、みたいな姿勢を取る。

周りで見ていた住民達は「おお」と、恐怖を与えていた青年達を倒す強者に喜びの声を漏らす。

「弱いくせに弱いモノいじめするなっつーの」

女性は片手でバットを軽く振り回しながら自分が倒した青年達を見回す。

1・・・2・・・・・・・・・3？

「あれ？４人いたよな・・・？」

彼女が倒したのは間違いなく４人。しかし現場に転がっている青年

は3人。よく見回すと、2人目に倒したハズの青年がいない。思い返せば、確かに一番ダメージは少なかったように思える。

「・・・チッ、仲間見捨てて逃げやがった。ほんとに見下げ果てた奴らだな」

呆れた、という思いを顔に出しながら、どこかへ向かおうとする女性を、先ほど青年達に捕まっていた少年が建物の中から走ってきて、目の前に立つ。その顔は喜びに満ちている。

「ありがとう、お・・・姉ちゃん!!」

一瞬、『お・・』と口籠もったが、それはカウントせずに、女性は笑顔で少年の頭をポンポン、と優しく撫でながら、歩き出す。と、その前に先ほど、建物から様子を窺っていた住民達が並ぶ。その中で、恐らく一番年長であろう、髪がほぼ白髪の男性が前に出る。

「先ほどはありがとうございました。お陰様でこの子も大事にならずに済みました。本当にありがとうございます。よろしければ、あなた様のお名前をお伺いしてもよろしいですかな？恩人様のお名前も知らない、というのは無礼ですからな」

非常に丁寧な言葉で礼を言ってくる人だが、その服装は様々な箇所が擦り切れ、決して『綺麗』とは言えない状態である。恐らく、過去に先程の青年達に暴行を受けた事もあるのだろう。

女性は少し考える表情をしながら並んだ住民達を見回し、再び肩にバットをトントン、として、「はぁ」と言葉を漏らす。

それを聞いた年長の男性がすかさず言葉を発する。

「いやいや、名乗りたくないならば無理には願いますまい。貴女には先程、恩を受けたばかりですからな」

「い、いや、そういう訳じゃなくて・・・・」

「？」

住民達は不思議そうに女性を見つめ、どういう事なのか、再び女性が口を開くのを待っている。

女性はバットを下へ向け、左手で頬を少し掻きながら右上の方を見ている。ちなみに右上には何もない。頬は若干の紅潮している。

「す、すみません。あんまり丁寧に褒められたことが無かったもんで・・・。おれ・・私は白神（しらかみ）　晶（あきら）って言います」

地球上にまだ、数多の国々が存在していた頃、西暦２０５０年、突如として世界は大災害に見舞われた。

それは地殻変動による大地震、大陥没、大隆起。そしてそれらによって引き起こされた大津波。最初の被害はアメリカ大陸。大地は割れ、１月も経たずに海へと姿を消した。

大国の消失に世界は大混乱となった。国から飛び出し、新たな国を求めて逃げる者。それすら出来ずに大地と共に消えていく者。世界

経済も大混乱となった。

しかし、災害は止まらなかった。アメリカ大陸の消失、沈没により発生した大津波は多くの島国を飲み込み、海へと沈めた。危機を察知し大陸へと逃げた人間もいた。

しかし、更に地殻変動は広がり、ヨーロッパ、や中東、オーストラリア、そしてアジアへと波及した。

地震は連鎖的に発生し、それに比例して隆起や陥没が各地で拡大。大陸に超巨大な亀裂が発生。移動手段、電子通信が分断。世界各地で暴動が発生。世界の国々がその機能を失う。

世界の終末を予見し、全ての人々が絶望の底へと落とされた。

そしてアメリカ大陸消失から3ヶ月。全ての大陸が沈んだかに思われた。ところが、何故か地球上に大地が残った国が存在する。

それは・・・・・『日本』

鬼に金棒（後書き）

投稿するの初めてです！書くのも遅いし、小説も途中でグダグダになってしまうかも知れませんが、読んで頂ければ幸いです！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4472i/

蒼炎と白雷

2010年10月14日15時50分発行